

# 授業改善に向けて 授業公開の試みを総括する

教育学部／平 沢 茂

## 1. FDと授業改善—教育研究所の取り組み—

日本でFDが話題になりはじめたのが、およそ20年ほど前のことであることはこれまでに、何度か書いた。

私の以前の勤務校は、FD、特に授業改善に比較的早くから関心を寄せ、教員の意識改革に取り組んだ大学である。大学改革を進めるためには、FDが不可欠であること、特に、日本の大学に乏しかった授業改善の重要性に関する教員の意識改革が大学改革の重要な柱であること、この2つのことを全教員の共通認識にするための取り組みが始められていた。

若手教員を中心に大学の授業改善に取り組む研究会がもたれ、様々な研究も進められた。当時、学生の私語があちこちの大学で問題となり始めており、私語に関する調査等も実施され、その対策を考えるような取り組みも行われた。

全学教員参加の、大学改革のシンポジウムが学内で開かれ、そこでもFD、授業改善が重要なテーマとなった。さらに、不十分なかたちではあったものの、授業公開の試みも始められたのである。その試みが始められたころに私は本学に赴任することとなり、その後の進展を見ることはできなかった。

さて、本学に赴任してみると、本学にも授業改善に関心を寄せる活動がなかったわけではない。教育研究所が、教員の授業を分析的に捉えたり、紹介したりする試みを行っていたのである。この試みは、今考えても斬新で、さすが教育学部をもつ大学だと思ったものである。ただ残念なことに、その活動は局所的であり、全学に広がりを見せるまでには至らなかったように思う。

しかし、ここにきて教育行政の動きとも関連して、大学におけるFDは全ての大学が取り組むべき課題であることが認識されるようになってきた。本学におけるFDをどう進めるのか、全学組織での取り組みがいずれ始まるにしても、大学における授業改善に関心を寄せ続け、『文教大学の授業』の刊行を続けてきた教育研究所が、何もしないわけにはいかない。

こうして2007年、教育研究所として授業改善への新たな取り組みを始めることとなったのである。初年度は、他大学の授業改善を見、それを紹介する報告書を作成した。そして、昨年度は、授業公開の試みを模索し、実践した。そして、今年度、授業公開をさらにもう一步前進させる試みに取り組んだ。その取り組みの一部を紹介し、次のステップを考える手だてにしようというのがこの報告書である。

もとより、FDは、授業改善が全てではない。教員の力量を高めることがFDの本義であるから、当然、研究の向上にも力を注ぐ必要がある。にもかかわらず、FDの中心が授業改善に置かれることが多いのはなぜだろう。それは、日本の大学の教員が、研究への関

心は高いものの、教育への関心が低いという実態があったためである。大学教員の職務は「研究・教育」と言いはするものの、その実、教育に無頓着という実態があったためである。現在のFDで、授業改善に光が当てられることが多いのは、このような現実を改善するためである。

## 2. 授業公開の意義と課題

### (1) 授業公開の意義

授業を公開することの意義は、概ね次のように整理しうる。

第1は、授業を公開する教員が、自分の授業を客観的に見直す機会を得るということである。現在の大学では、まずほとんどの教員が、授業をいいかげんに済ませようとするにはあるまい。それなりの工夫をし、学生の興味と関心を高め、理解を促進するための工夫をしているに相違ない。けれども、その工夫がはたして的を射たものであるのか否か、それを客観的に見直す機会は多くはない。学生による授業のアンケートが、その機会を与えてくれることもあろう。しかし、現在の授業アンケートが果たしてそうしたものになっているかと言えば、まだまだ改善の余地がある。その点、授業を公開しようとするれば、ふだん何気なく行っている自分の授業を「見せる」あるいは「見てもらう」というなにがしかの気構えを持たざるを得ない。それが、自分の授業を客観的に捉える機会を与えてくれるのである。

今回の授業公開においては、公開する授業に関する授業計画書の作成をお願いした。小学校などの指導案ほど綿密なものではないものの、授業のあらましを書いてもらったわけである。おそらく、大半の教員がこのような文書を作成する経験はなかったものと思われる。急で、無理なお願いにもかかわらず、多くの教員の協力が得られ、主催者として有り難いことであった。ともあれ、こうした文書の作成は、自らの授業を客観的に捉え直す機会となったのではないか。

第2は、授業を参観する者にとっての意義である。これはあらためて言うまでもないであろう。すなわち、他教員の授業を見ることで、自らの授業を振り返る機会を得ることである。今回、私自身は、2つの授業を見る機会を得た（主催者としては全ての授業を見たいところではある。しかし、自らの授業もあり、他の公務もある中で、これが精一杯であった）。いずれも若手教員の授業で、どちらの授業からも、私は多くの示唆を得ることができた。収穫は大きかったと言ってよい。若いエネルギーは私には真似のできないものであるにせよ、彼らが見せてくれた学生との距離感のとり方などは、大いに参考になった。

第3は、大学におけるカリキュラムを捉え直す機会になるということである。自分の担当科目以外の科目内容について、私たち大学教員はふだんあまり関心を寄せることがない。しかし、授業公開の機会などに他の教員の授業を見ることで、自分の所属する大学、学部のカリキュラムの構造を多少なりとも知ることになる。そのことで、担当科目のカリキュラム上の位置づけを知り、その内容を見直す機会が与えられるということである。

第4は、授業に関わる条件整備に関心を寄せる機会となることである。受講生数や物的条件など、日頃、漠然と感じている問題を他の授業を見ることで客観視する機会を得ることとなるのである。たとえば、本学では、学生用の机と椅子を移動させてグループ・ワークをさせるのには適さない教室が多い。あるいは、プロジェクタやスクリーンの位置、暗

幕など、視聴覚メディア（最近流行りの言葉で言えば、ITまたはICT）の使い勝手があまり良くない、等々のことを再認識することになる。

## (2) 授業公開の課題

本研究所は、研究所であって、FDを推進する権限を持っているわけではない。また、専任の教員がいるのでもない。したがって、今回の試みもまた、あくまでも「実験的試み」の域を出るものではない。にもかかわらず、これだけ多数の授業を公開し得たのは、ひとえにご協力下さった本学教員のボランティア精神によるものである。

そうした先生方のご協力にもかかわらず、予想どおり参観する教職員は少なかった。私自身がそうであったように、多くの教職員は日常の授業に従事していたわけで、参観したいと思ってもできないという事実があったからである。授業公開のために特別の時間割が組まれたわけではない以上、これはやむを得ないことであった。これは、研究所の試みの限界ということになる。

本学が、全学的にFD、特に授業改善を推進させるためには、全学的なFD推進機構を設ける必要があるということだ。

## 3. 本学の授業改善に向けての課題

全学的なFD推進機構の設置以外に、本学の授業改善に係る課題を以下に整理しておこう（これまでも何度か書いていたことだが）。

第1は、クラス・サイズの問題である。本学は、比較的少人数教育の多い大学である。しかし、少ないとはいえ、受講生数が多すぎると思われる授業もある。こうした事実を把握し、改善することは本学の授業改善上、喫緊の課題である。

第2は、上述したように、視聴覚メディアに係る条件整備である。本学の教室と視聴覚メディアの実態では、その利用のためには、10～15分は早く教室に行って準備しなければならない。

13号館の教室を例に取ってみよう。13号館のパソコン等を収納するボックスの状態を見たことがおありだろうか。鍵を開けると、ノート・パソコンがボックスの下部に放り込まれている。このノート・パソコンには盗難防止のワイヤーが取り付けられている。これが、電源コードやLANコード、マウスのコードなどと絡まって、取り出すのに一苦労ということが多い。

さて、いざ取り出してセットする。今度は、プロジェクタの電源のオン・オフに一苦労する。リモコン操作による電源のオン・オフは、時に不確実である。場合によってはリモコンの電池が切れていて、電池をもらいに走らなければならないこともある。暖房シーズンには、プロジェクタが加熱し、パワー・ポイントやビデオの途中で突然ランプが消えてしまうこともある（どうやら、このケースは、プロジェクタの放熱ファンの問題ではないかと想像される）。こうした機器の管理は誰が責任を負っているのか。

また、スクリーンが黒板の全面を覆うように設置された教室も多い。黒板と視聴覚メディアとは、並列的に使われるべきものであるから、このような配置は早急に改善されなければならない。

第3は、教室、机、椅子等の条件整備にまつわる課題である。聴講型の授業だけではなく、参加型の授業が増えている。学生にグループ・ワークをさせるための教室や机、椅子

等が、本学の場合、十分に整備されているとは言い難い。教員の授業の実態を把握し、どのような教室環境が必要かを考慮した教室作りが求められる。

以上、最低限の課題を列挙した。挙げればまだまだ課題はある。ことに、T A（ティーチング・アシスタント）などは、もっと大規模に導入して欲しいところだ。

上述したように、なんの権限も持たない研究所の試みに、これだけ多くの教員が協力してくれるということは、本学の教員がいかに教育熱心であるかということの証しである。しかし、いつまでも、その熱意と好意に頼ってはなるまい。いずれ限界がくる。大学としてこれらの問題にどう対応するのか。そろそろ、本格的な取り組みが始められなければなるまい。